



MA日本キックボクシング連盟
新春マッハ士道館
戦国シリーズ仁義なき闘いパート3
1月30日 ●東京・後楽園ホール

○上下のコンビ、左右の連打など技術的な進歩が見えた佐藤堅一(右)だが、彼の最大の武器はハイトの部分にあることは間違いない。
○必死にエルポーを繰り出す井上哲、「もう33歳あれだけじゃダメなんですけど、でも試合ができることだけで嬉しいんで……」



●セミファイナル/MA日本スーパーライト級
タイトルマッチ3分5R(前は試合)
(高島)王座
△佐藤堅一(土道館所属、30歳、28勝)
(判定ドロー1-0) ●井上哲(土道館所属、33歳、
14勝) ●井上 哲(土道館所属、33歳、14勝50敗50
引き分け) ●井上 哲(土道館所属、33歳、14勝50敗50
引き分け)

「なんだ、ドローになっちゃったか」という言葉を吐くことななかれ!



○判定が下る前に、こんな表情をみせた佐藤。「今年は、どんどん試合に出ていきます!」と力強く宣言した
○序盤はこのローキックや、左ミドルを的確に放っていた

このところ、ともにピリツとしなかった佐藤堅一と井上哲が闘ったタイトルマッチ。一昨年より新しいスタイル、作りに助んでいる王者・佐藤が、ワンツーやローを散らして攻める。対して、これが4度目の日本タイトル挑戦となる井上も、得意のエルポーにつなぐために、ローや左ミドルを効果的に繰り出す。互いに力み気味ながら、一進一退の攻防が続くなか、気がつけば佐藤が頭部を、井上が右尻尻をカットする壮絶な展開に「くすぶり続けていたものを、吐き出すきっかけになりました」と佐藤が言うように、流血以降はかなり荒っぽい試合に。思い切りフックを振り回す佐藤と、渾身の力をヒジに込める井上。
「もう試合を組んでもらえないかもしれない」と、結果的にクリンチが多くドローに終わった試合を井上が振り返る。が、記者席から試合を見ていた者の意見として、多彩な技が出た前半よりも、不器用ながら一歩も下がらず、打ち合いを続けた終盤の二人に、胸が熱くなったことをここに記しておく。(高島)



○ヘビー級5R戦第10試合、元極真のジャド・リード(右・オーストラリア)が、ヘビー級の、ホープ、内田ノボル(ベクトリー)と対戦。リードはローで攻めるものの、内田がパンチのラッシュで主導権を握り、2R三度のダウンを奪い、2R2分47秒KO勝利を飾った

元極真のリードは内田ノボルに陥落 武藤、横山、好敵手対決は決着せず



○元MAライト級王者の武藤孝行(右・土道館)と横山(谷山)との61・23・契約5R戦。ヒジなど近距離で攻める武藤に対し、横山はロングフックなど中間距離で応戦し、両者は互角の激しい打ち合いとなった。結局1-0のドローに終わり、決着つかず。今後の再戦が期待される



○セミのMAバンタム級タイトルマッチは序盤、王座を意欲して緊張してしまっただけ、王者・山本ノボル(右・土道館シカゴ)に対し、デビュー以来4連勝中の大谷則之(土道館)がパンチで攻勢をかける展開となった。中盤以降、山本はミドルやヒジで反撃、終盤、一進一退の攻防となるが、2-0の判定で大谷が勝利を収めた

“実力者”山本ノボルに競り勝ち、 5戦目で大谷則之が新王者に!



○初の5R戦、デビューも戦目でベルトを巻いた大谷が「王座戦というプレッシャーがあって、結果が出て嬉しい」と王座奪取に目を潤ませていた。3R戦からいきなりの王座挑戦という異例の早さで王者となった大谷が今後、どんな活躍を見せるか注目される